

Y小中 K先生のあたりまえ

その①低学年「思いっきり造形遊び体験を重ねて生かす」

最初の授業で一番に聞くことが「図工が好きな人？」もし嫌いだと答える児童が一人でもいたら、「全員が好きになることが私の授業の目標です。」と宣言をする。小学校低学年では、とにかく五感を使って造形遊びをさせたい。そのために、日頃から季節を感じ、素材を集め、満足するまで活動できる環境づくりに全力を注ぐ。(場として活動のし易さ、色・材料・用具の選択肢、教師の演示など)



2年「海でいっしょに〇〇しよう」では、それまで体験してきたはじき絵・クレヨンこすり・あわ・色つくりスタンプなどの造形遊びと色染め・

マーブリングで作ったオリジナルの紙を組み合わせて作品に向かった。海中の人物の動きはタブレットで友達と撮影し合い、生き物は国語「スイミー」の中の生き生きとした表現をイメージして描いた。

その他にもタブレットの活用として、学校の中の物を生き物に見立てて目玉を付け撮影(自分も一緒にツーショットバージョンも)し、全員で鑑賞会を行ったり、作品の途中から完成まで記録し、児童のふりかえりと教師の評価に活用したりした。



新聞紙ワールド「1年生をしょうたいしよう」



色つくり「どうやって作ったの？」

そして、図工の授業を重ねるうちに「次は何やるの?」「もっと作りたい!」「家から材料もってきました。」などいつのまにか自ら図工室に入ってくる子供達を見てにやりとする私…。

その②中学年 「みんなと違うことを発想する楽しさ」

中学年ともなると、図工が好きなのは当たり前。次なる私自身へのミッションは「オリジナル感。」だからといって、決して高学年や中学校の領域に先入することなく、学年で育てる内容に焦点を絞ることが大事。

4年「へんでこ山物語」では、教科書を手がかりに「設計図(イメージ図)シート」を作成した。どんな物語(いつ、どこで、だれが…)なのか、場所や山の形、大きさにピッタリはまるのはどんな枠(画用紙)か?それを元にイメージをふくらませたりクリアにしたりできるよう、質問やアドバイスを。そして、自分で画用紙を選択し、作品作りにとりかかった。授業の途中や終わりに(必要に応じて)「見合うタイム」を設けることで、発想に行き詰まった時に友達の作品からアイデアを得ることもできる。また、完成までの時間差に対応できるよう予備の画用紙(兄弟、家族山)を準備する。算数などのチャレンジ問題と同じ発想だ。

子供達は図工の時間は自分らしさの表現の場であることに気づき、版画でも立体でも意欲的に取り組み始め、廊下に展示するのを楽しみにては休み時間お互いの作品の感想を語り合うのだ。(つづく)



紙の特徴を生かしてタワー作り

図工は総合力の結集!



よく見るとこれまで経験してきた技法がたくさん使われている